

熊本県立高森高等学校 平成25年度学校評価表

1 学校教育目標

県立学校における教育指導の重点や取組の方向等に則り、「小さな学校だからできる大きな教育」～一人ひとりの生徒を大切にする学校～を、目指す学校像とする。

2 本年度の重点目標

(1) 授業の充実

思考力・判断力・表現力等を確実にはぐくむために、わかる授業を一層推進し、学習意欲の向上を図り、学習習慣を定着させ、自主的・意欲的に学習する生徒を育成する。

(2) 生徒の進路保障

高い志をもって自己実現を果たすため、体験的な学習やキャリア教育などを通し、進路目標を明確に持たせ、自らの未来を切り拓く生徒を育成する。

(3) 人権文化の創造、道徳教育の充実

社会生活を送る上で人間としてもつべき最低限の規範意識を、発達の段階に応じた指導や体験を通して確実に身に付けさせるとともに、人間としての尊厳、自他の生命の尊重や倫理観などの道徳性を養い、豊かな人権感覚を身に付けた生徒を育成する。

(4) 環境教育の充実

現在、地球規模で発生している環境問題について、その原因・実態・防止策などを認識させる。学校版ISOの取り組みによって、実行力・行動力のある生徒を育成する。

(5) 安全管理、危機管理意識の徹底

安全管理、危機管理に対する職員の認識を深め、事故や危険を未然に予防するとともに、災害等の突発的な事象に対して適切に行動し、生徒の安全を確保できる学校体制を作る。また、生徒自らが災害等に対して適切に行動できるように学習を深める。

3 自己評価総括表

評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校経営	教職員の資質向上	最新の教育的課題を踏まえた教育実践をしているか。	○教科指導力の向上を図る。	・校内外の研修に積極的に参加する。 ・異教科ＴＴ授業の実践と研究推進する。 ・相互評価を行う。	B	◎研究授業や公開授業を積極的に実践し、参観者による授業評価を行い、指導力向上にむすびつけた。行うことができた。 ●校外研修への参加状況について教科により差が見られた。
	地域への浸透	地域との連携を図り、高森高校の活動状況を発信し、説明責任を果たしているか。	○学校の活動状況・生徒の活躍等を外部に積極的に発信する。 (保護者アンケートにおけるプラス評価の平均85%以上を目指す)	・学校行事後の学校HPの迅速な更新を行う。(3日以内の更新) ・高森高校通信の定期的な発行と配布地域の拡大。 ・学級通信を発行する。 ・学校評議員、保護者、後援会、同窓会との連携を図る。		◎学校HPは行事ごとに速やかに更新された。また高森高校通信を定期的に発行することができ、関係中学校への配付のほか、新聞折り込みを利用して町内、近隣町村へ配布し活動状況を提供することができた。 ●保護者アンケートでのプラス評価平均が82.6%と目標を下回ったため、数値が高まるように取り組まなければならない。

学校経営	安全管理の徹底	安全管理・危機管理に対する意識が徹底され、安全な教育環境が保たれているか。	○危険箇所を日常的にチェックし改善する。 ○事故や災害等に対して迅速かつ適切に対応する。	・安全点検を実施する。 ・危機管理マニュアルを見直す。 ・自然災害（噴火・地震・土石流・水害等）に適切に対応するための防災研修会を実施する。	B	◎学期毎に安全点検を実施し、危険箇所の改善が図られた。 ◎学校経営案と危機管理マニュアルを見直し、自然災害時（地震）の対応をについて追加・修正を行った。 ●自然災害に関する研修会を実施することができなかった。
学力向上	確かな学力育成に向けた授業研究	P D C A サイクルによる授業改善が行われているか。	○シラバス及び生徒による授業評価を活用した授業改善を推進する。 ○各教科の評価規準の設定及び評価方法等の工夫改善を行う。	・シラバスによる計画的な指導を行う。 ・生徒による授業評価を年間2回実施し、授業改善に活用する。 ・各教科の評価規準を作成し評価に活用する。	B	◎学年別のシラバス集を作成し、授業計画及び評価の観点等について生徒、保護者に周知させることができた。 ●生徒による授業評価の活用及び評価規準の作成については不十分であった。
		「わかる授業」を目指した授業研究が行われているか。	○授業等の教育活動を公開する機会を積極的に設けるとともに研究授業を積極的に実施し、教科指導力を高める。 ○教育の情報化を推進し、教員のICT活用指導力の向上を図る。	・参観授業週間、文化フォーラム等の教育活動を公開する機会を年間5回以上設定し、異教科連携授業、外部とのTT授業等の研究授業を各教科1回以上実施する。 ・ICTを活用した授業を教員全員が1回以上実施する。	B	◎外部に教育活動を公開する機会を多く設定することができた。また、研究授業については、TT授業を中心にほとんどの教科で実施し、ICT活用型授業も積極的に実施することができた。 ●保護者アンケートにおいて、授業に関する評価が昨年度と比べて低下した。
キャリア教育（進路指導）	進路意識の高揚	生徒が主体的に進路を選択しようとしているか。	○インターンシップをセルフプロデュース形式で実施し、能動的に職業に対する理解を深めさせる。	・進路希望調査・進路マップデータを活用する。	A	◎セルフプロデュース形式でのインターンシップが定着し、生徒の職業理解を深め進路意識を高揚させることができた。
	多様な進路希望の実現	就職希望者への指導は適切か。	○就職希望者全員の就職決定（正採用）を目指す。	・キャリアサポーターとの連携による求人開拓を行う。 ・面接指導・履歴書作成指導を充実させる。	A	◎就職希望者全員が就職先を決定することができた。 ◎キャリアサポーターとの連携が円滑に進んだ。
		進学指導者への指導は適切か。	○進学希望者全員の進学決定を目指す。 ○国公立大学合格者の複数輩出を目指す。	・個別指導・対外模試・AO入試対策指導を充実させる。 ・オープンキャンパスや進学ガイダンスへの積極的な参加を促す。	B	◎進学希望者全員が進学先を決定することができた。 ●国公立大学合格者が1名にとどまった。 ●全職員をまきこんだ指導体制を築くという課題が残った。

生徒指導	道徳心の育成	ボランティア活動に意欲的に参加し、社会で果たすべき役割を自覚しているか。	○参加率90%以上を目指す。	・生徒会を中心に準備、呼びかけを行い、その都度出席率を公表する。 ・全校ボランティアを全校生徒・全職員で実施する。	A	◎昨年度に引き続き年間出席率は90%を超えており目標達成できた。昨年度から実施している全校ボランティアも定着してきている。
生徒指導	部活動の活性化	部活動における学年をこえた交流が活発に行われ、充実感、達成感を感じているか。	○部活動加入率100%、体育系部活動加入率60%以上を目指す。	・「部活動の日」を毎月1～2回実施する。 ・毎日の活動を安全に行い、充実させる。	A	◎加入率の数値目標は達成できた。部活動の日の定着により活動の活性化に繋がっている。3年生引退後に各部とも人数が減り活動に影響が出てくるので内容の工夫に留意したい。
	交通安全教育の徹底	交通違反・事故が減少したか。	○交通違反件数・事故件数について年間0件を目指す。	・実技講習会（原付免許取得者全員）、原付・自転車の安全点検の実施。 ・違反者には特別講習会を行う。	A	◎違反や事故もなく、目標達成できた。徒歩、自転車、を守る観点からも引き続き注意の喚起に努めたい。
人権教育の推進	人権感覚の育成	「自分の大切さとともに他の人の大切さを認めること」ができるようになったか。	○年度末生徒アンケートの結果で「できるようになった」「ややできるようになった」の割合を60%以上にする。	・自分のことや他者との関係等を振り返り、語り、綴る取組（人権作文等）を行う。 ・身近な人権課題に関する講演会を実施する。	B	◎生徒アンケートで「自他を大切にする姿勢がある」と回答した生徒は85.9%であり、具体的取組の成果があった。 ◎講演会や人権作文の取組をとおして、自己の生き方や他者との関わりについて考えることができた。
	推進体制の確立	人権教育の意義や目標が共有化され、組織的に推進されているか。	○校内職員研修を充実させるとともに、校外における人権教育研修会に積極的に参加する。	・学期に1回校内研修を実施する。 ・全職員が校外研修に1回以上参加する。	A	◎生徒理解研修や実践報告会に加え、現地学習会を実施し、実感を伴って人権課題への理解を深めた。 ◎校外研修へ積極的に参加し、実践事例をしたり意見の交流を図ったりすることができた。
	命を大切にする心を育む指導	自他の生命を尊び、大切にしているか。自らの在り方生き方を学ぶとともに、夢や目標をもち、その実現に向けて努力する態度が育成されているか。	○すべての教員が学習活動をとおり「命を大切に」を育む指導を行う。 ○行事等に、生徒が自尊感情を高め、自己実現を図るための在り方、生き方について学ぶ視点を入れる。 ○計画的な全校終礼を実施し、講話をとおして多様な価値観や命の大切さを学ぶ。	・教科指導において関連する学習内容を確認し、年間を通した指導を行う。 ・全校一斉会食の日や、共汗の日を実施し、生命や自然に対する畏敬の念の高める。 ・全校終礼を年6回実施し、職員による講話を行う。	B	◎会食の日や共汗の日等の活動を通じて、個々の役割を果たしながら互いに協調し自他を尊ぶ態度を高めた。 ◎全校終礼を7回実施し、自らの生き方・在り方を考えることができたと同時に、多様な考え方を尊重し、命や健康を守る意識を高めた。 ●教科指導における人権尊重の視点に立った取組について、シラバス等を活用した計画と検証が必要。

特別支援教育	生徒理解の充実	生徒一人一人の教育的ニーズを把握し、それに基づいた支援が検討されたか。	○学期に1回以上の生徒理解研修を実施する。	・通常授業、参観授業による生徒観察（気づきメモ）の実施。 ・日常的な職員間の情報の共有化を行う。 ・生徒理解研修を計画的に実施する。 ・教育支援会議を実施する。	B	◎会議以外でも、日常的に生徒についての情報交換が行われていた。 ◎生徒理解研修を3回実施した。3学期は他の研修時に必要な情報の共通理解を図った。 ◎教育支援会議を3回実施し、支援の成果と課題について検討できた。 ●気づきメモについて職員へ依頼したが、提出が少なかった。様式や実施方法について検討を図る必要がある。
特別支援教育	中学校との連携	連携を通して、個々の生徒の課題の早期把握がなされたか	○入学前に関係中学校を訪問し、全新生徒について情報を交換し、必要な支援体制を整備する。 ○入学後も状況に応じて随時情報交換を行う。	・関係中学校訪問（入学式前）を実施する。 ・学年団を中心に全職員の課題への共通理解、支援のための情報の共有を図る。 ・随時、必要に応じた中学校との情報交換及び相談の実施。	A	◎入学予定者の中学校を訪問し、情報交換を行った。また、必要な情報については生徒理解研修で共通理解を図った。 ◎学年会や特別支援教育委員会で生徒の状況把握や支援方法の検討を行った。 ◎生徒について情報が必要な際は、早急に中学校を訪問したり電話で確認を行った。
環境教育	環境保全に寄与する態度の育成	人間と環境について正しい認識を持っているか。	○各教科等において、環境問題に関連した授業を体系的に実施する。	・各教科等で実施する環境教育をシラバスに明示する。 ・家庭及び総合的な学習の時間で環境調査やフィールドワークを行い、理解を深める。	B	◎総合的な学習の時間で環境に関する内容の授業を展開した。特に1年生のやまびこプランのフィールドワークは効果的な活動であった。 ●各教科での実践状況が充分ではなかったので、働きかけが必要である。
		環境問題の解決に必要な判断力と主体的に行動する態度の育成を図っているか。	○学校版環境ISOについて生徒が主体となって取り組む組織を構築する。	・生徒会を主体にISOへの取り組みを具体化し、PDCAサイクル（計画→実行→評価→見直し）をもとに実施する。 ・学校近隣への清掃活動ボランティアや美化活動のさらなる充実を図る。	B	◎環境ISOの取組は充実している。特に美化作業として行う早朝ボランティア・風鎮祭花火後の片づけ、一日一汗運動、共汗の日などは積極的に参加していた。 ●リサイクルやエコに関する活動（キャップ回収・こまめな電気消灯等）が不十分なので意識を高め、実践できる取組を考えていきたい。

健康 教育	食育の推進	健全な食習慣を身につけるための学習が行われているか。	○食育旬間における取り組みを実施する。 ○朝食摂取率85%以上を目指す。	・会食の日を年に2回、食育旬間に実施する。 ・「食育通信」を毎月発行し、食に関する意識を高める。 ・郷土料理講習会（TT授業）を行う。	B	◎会食の日を行うことで、調理技術の向上や食を通じてコミュニケーションを深めることができた。 ◎郷土料理講習会に地域の方を講師として迎えることで、料理の背景や地域のことを学ぶとともに、交流が深まった。 ●食育通信の発行を3回行ったが教師が主体となったため、今後は生徒が主体となるような体制づくりが必要である。
----------	-------	----------------------------	---	---	---	---

4 学校関係者評価

平成26年2月10日に学校関係者評価委員会を開催した。評価委員の方々からは、本校の取組に対して概ね肯定的な評価をいただくことができた。「保護者や生徒のアンケート結果からも学校生活に対する満足度が高く、教育活動へ肯定的な意見が多いのは学校の方針を生徒がよく理解している。」「地域の行事にも積極的に参加しており、連携が進んでいる」などの評価を得た。

一方、学校行事についての満足度が相対的にみてやや低く感じられるので、行事の内容を変更するなどの取組が必要であること。本校の教育目標を、より具体的な見える形にし、学校全体の方向性をより明確にして発信することで、外部に理解を得やすくなること。保護者がより頻繁に学校に足を運ばれるような取組などをおして、一層の学校の活性化を図るべきだという意見をいただいた。また、アンケート結果を精査することで、何らかの改善策につなげていくことができるという提言もあった。

南阿蘇における唯一の県立高校として本校に対する地域の期待は高いものがある。その期待に応えるためにも、教育環境を整備し、生徒のニーズに対応できる教育活動を実践し、その結果を具体的な形として現わしていくことの重要性を再認識することができた評価委員会であった。

5 総合評価

ほとんどの教育活動が概ね計画通りに実施されており、学校がバランスよく機能していると言える。

- (1) 学力向上のための授業の充実に関しては、シラバスによる計画的な指導が進められるとともに、研究授業等の実践により、指導力の向上が図られた。生徒による授業評価についても良好な評価結果が得られた。また、機を捉えた異教連携型のチームティーチングの実践やICT機器活用により、生徒の興味を喚起するとともに、基礎学力の定着につながった。
- (2) 進路指導については、個々の生徒の状況に応じた取組を進めることで早期に全生徒の進路先が決定した。就職ではキャリアサポーターの支援も大きく、地元高森町や阿蘇を中心に内定をいただくことができた。進学では12年振りとなる熊本大学への合格者が現れた。進学を希望する生徒に対しては、早い段階から学力の向上を図る取組を進めていきたい。
- (3) 生徒指導面では、特別指導もなく、概ね落ち着いた学校生活が送られている。なかでも、欠席数が少なく、遅刻がほとんどないという状況は生徒の意識の高まりと日常の指導の表れであると思われる。また、ボランティア活動への参加が顕著で、地域や他者に貢献したいという意識が高まっている。今後も全生徒が安全に満足した学校生活を送ることができるように取り組んでいく。
- (4) 人権教育については、様々な人権課題からの個別アプローチや他者を肯定的に受け止める指導を継続的に実施することができ、生徒の自他を大切にする姿勢が育成されている。また、多くの講話を通して自己の在り方や生命尊重の意識を高めることができた。職員に対しても校内研修を充実させるとともに校外研修への積極的参加を奨励し、資質向上を図った。
- (5) 特別支援教育については、生徒理解研修や委員会を定期的に開催することで、生徒一人一人の状況を把握するとともに、個々に応じた支援を行うことができた。今後も、中学校との連携を一層進めることで、スムーズな高校生活への移行を進めていく。
- (6) 環境教育、健康教育の分野では、総合的な学習の時間を活用しフィールドワークを実施したり、数多くのボランティア活動に参加したりすることで、美化意識や奉仕精神を高めることができた。また、食育の取組により生徒の朝食摂取率が昨年より10ポイント以上高くなるという成果が得られたが、学年間に差が見られるのが課題である。

6 次年度への課題・改善方策

- (1) 「わかる授業」を目指し、教職員一人一人が自己研鑽を重ね、指導力を向上させる取組をさらに進めていく。
- (2) 進学希望生徒へ3年間を見通した指導体制を構築し、生徒が早い段階から学習に意欲的に取り組む姿勢を育成する。
- (3) 後援会総会や公開授業などへの保護者の出席率を向上させ、本校の教育活動への理解を深めるとともに、連携を進め、一体となった教育活動を推進する。
- (4) 魅力ある学校づくりをより一層推進し、本校の取組や実績を積極的に外部へ発信することで、入学生徒の増加を目指す。